

竹田聴洲の祇園祭調査と写真フィルム

齊 藤 利 彦

〔抄 録〕

近年、民俗学者竹田聴洲とその民俗学に関する研究は進展しつつあり、竹田の再評価が始まっている。竹田の研究業績は著作集全九巻に報告書などをはじめ、論考があまねくまとめられている。しかし、竹田には埋もれた業績がいくつかある。そのひとつに祇園祭の民俗学的調査がある。

この調査は写真という非文字資料によって、当時の祇園祭の民俗的諸行事を記録したものである。その全体像や竹田が調査のな

かで何を見出したのかに関しては別稿を用意しているが、本稿では、竹田が祇園祭調査をおこなうなかで直面した写真撮影の問題点を考察し、そのうえで、当時の民俗芸能調査の技術的限界などにも触れていきたい。

キーワード 竹田聴洲、京都、祇園祭、写真フィルム、被写界深度

はじめに

平成二八年（二〇一六）一月一九日、民俗学者竹田聴洲は生誕百年をむかえた。

いうまでもなく、竹田聴洲は仏教民俗の分野において、多大な研究成果をあげた民俗学者のひとつである。

竹田は民間寺院の成立過程を明らかにするとともに、村落における

寺・墓・祖先信仰の歴史的関連を解明し、さらに、石塔成立以前には寺堂が詣墓の機能を果たしていたことを実証した。この成果によって、のちの民俗学における両墓制研究の基礎を築いた^①。

近年、竹田聴洲研究、あるいは竹田民俗学に関する研究は進展しつつあり、竹田の再評価が始まっているといえるが、竹田の研究業績は著作集全九巻^③に報告書などをはじめ、論考があまねくまとめられている。しかし、竹田には埋もれた業績がいくつかある。そのひとつに故

竹田保子氏が「夫の仕事で世に出ていないもの」と称した、祇園祭の民俗学的調査である。

この調査は同志社大学人文科学研究所の共同研究のひとつで、祇園祭の諸行事をカラー写真八八八枚で残したもののだが、換言すれば、写真による祇園祭の民俗誌ともいえる。

竹田による祇園祭調査の報告書は、同研究所の研究紀要に『京都祇園祭採訪日記抄』と題する、竹田の日記から調査日程の部分抽出・編集した内容が発表されたのみで、正式な報告書はでない。なぜなら、本調査の成果は後日、デラックスカラー版で出版する予定・計画があつたからだと推察する。

『京都祇園祭採訪日記抄』は著作集第八巻に収録されており、その存在は知られているが、労多かつたこの調査は、従来、ほとんど看過されてきた。

竹田は祇園祭の調査を進めるなか、とりわけ、露光の問題や写真フィルムの「可写深度」、すなわち被写界深度をめぐって、相当の苦慮のもと対応しながら調査を進めた。この点は、昭和三〇年代における民俗芸能調査の技術論的問題としても注目できる。

ところで、竹田が民俗学者として、研究における画像とその使用に関して、どのような考え方をもっていたのか、竹田自身の発言などは管見の限り、見当たらない。しかし、「竹田先生のあるところ、カメラあり」との証言があるほど、竹田は日常的に様々なものを写真に撮り記録として残していたことはよく知られ、竹田家に伝わる竹田撮影の写真アルバムは八九冊に及ぶという。

このことからしても、民俗学者として、あるいは民俗学者だからこそ、竹田は画像という手法で、対象を記録していくことを重視していたことは間違いないだろう。

筆者は近年、京都における民俗芸能調査の映像記録撮影に関して、西田直二郎を軸に考察したが、その調査方法論上の系譜に竹田が位置すると考えている。竹田は恩師西田の方法論を継承し、映像記録撮影という方法で、京都の念仏系民俗芸能を記録し資料化を図ったが、一方で、祇園祭の諸行事を、民俗学的角度から静止画である写真によっても資料化したのである。

本稿は竹田が祇園祭調査をおこなうなかで直面した画像撮影の問題点に特化し考察したうえで、当時の民俗芸能調査の技術的限界などにも触れていきたい。

第一章 調査の経緯と記録方法をめぐって

第一節 竹田聴洲の生涯と民俗学

これまで、拙稿でも竹田の生涯などについては簡潔にまとめるなどしているが、本稿でも論の展開上、竹田の人と学問を簡単ではあるが押さえておきたい。

竹田は大正五年（一九一六）一月二九日、大阪市西天満の浄土宗寺院妙香院に生まれ、西天満小学校、北野中学、第四高等学校を経て、昭和十一年（一九三六）四月、宇野円空の指導を受けるため、東京帝国大学宗教学・宗教史学科に入学するものの、宇野が東京帝大を退官

し、後任がキリスト教史の石橋智信であったこと、史学への転科も考えたが、当時の東京帝大の国史学の学風になじまなと思ったことなどから、一年で退学した。竹田は当時、文化史で高名な京都帝国大学の西田直二郎のもとで学びたいと考えて、あらためて京都帝国大学に入学したのである。¹⁵

同期の横田健一は、竹田が「同じ浄土宗の寺院（大阪市天寧寺）出身であり、文化史学で令名のある」西田の指導を受けたくて、「京大へ入って来た」と回想しているが、ふたりはともに「西田先生の文化史学を学びたいという強い志向」をもち、民族学・民俗学にも強い関心をもっていた。¹⁷

当時の京都帝大史学科では、西田の民俗学に対する理解から、肥後和男、三品彰英、柴田実、池田源太、国分直一、時谷透、平山敏治郎、高谷重夫、五来重など、民族学、民俗学の方法論を取り入れた研究者が多かった。¹⁸ 竹田は西田のもと、柳田国男の強い影響をうけながら、西田の文化史学を吸収し、やがて、仏教民俗学の道へと歩むようになる。そのおり、柳田の著書から大きな感銘をうけたことを、つぎのように語っている。

柳田先生の『先祖の話』（昭和二年、筑摩書房）を紐いた時の、それまで眼を覆っていた鱗が一時に取り去られたような感激は今以て脳裡に鮮やかである。¹⁹

昭和二十九年（一九五三）四月、竹田は同志社大学商学部専任講師

となり、安定した研究環境が整ったこともあり、精力的に研究を推進していった。

それまでの墓制・同族祭祀・宮座研究をさらに発展させ、そのうえで、村落研究の一環としての墓制研究を精極的に進めるとともに、地域の無名寺院を歴史民俗学的に分析していった。それは、浄土宗寺院の開創伝承を収録した『蓮門精舎旧詞』の分析であり、これらの業績は後述する博士論文、そして、大著『民俗仏教と祖先信仰』に結実していく。

昭和三五年五月、処女出版となる『日本人の信仰』（創元歴史選書）を高取正男と共著として出版、同月に『浪華一心寺抄』を大阪一心寺から、同年十月には単著『祖先崇拜―民俗と歴史』を平楽寺書店より刊行する。また、この十年間に三七本の論文や小文を著しているが、その大半は仏教民俗、とりわけ、近世村落と墓制や、檀家制度に関するもので、旺盛な研究成果の発表はそれまでと変わらなかった。

『葩と實』では、この時期の竹田の研究を「墓に明け墓に暮れる」と表象しているが、まさしくその通りといえよう。

一方、僧侶としては、同年八月、丹波亀岡の無量寺より京都洛東百万遍知恩寺の寿仙院にはいった。四四歳の夏のことで、これ以降が竹田の京都時代となる。

かくして、昭和三〇年代から四〇年代の竹田は、従来の研究を基盤として、さらに、研究を進展させるとともに、それをまとめ、かつ新たな研究領域を開拓する時期であった。このような時期に祇園祭調査は行われたのである。

第二節 同志社人文科学研究所と竹田

竹田が行った祇園祭の写真撮影による民俗学的調査は、同志社大学人文科学研究所の共同研究のひとつとして実施されたものである。

昭和三二年（一九五六）四月、同志社大学人文科学研究所は従来の組織体制を刷新、新規定に基づき「研究調査部」と「資料部」を設置した。これにより、研究調査・資料収集を中心にした活動を展開していく。

当初から二カ年は、「近代京都における社会発展の諸条件の研究」が単独で部門としておかれ、そのなかに、第一班「意識・思想（宗教・芸術・文明開化）」、第二班「教育・行政（自治）・政治」、第三班「産業構造」が置かれた。⁽²⁰⁾

各班は特色ある研究と調査を展開するが、とりわけ、第一班は三品彰英の「京都方言史料報告」、竹田の「六斎念仏、鞍竹切りに関する民俗学的研究」を推進する。⁽²¹⁾

同三四年（一九五八）四月、共同研究は第一研究から第三研究という三領域体制となり、それまで組織されていた「近代京都における社会発展の諸条件の研究」は、第一研究として継続することとなった。

第一研究は三つの研究班が置かれ、近代京都における社会の発展条件を研究対象としたが、このうち、第一班は「伝統文化の研究、特に言語、美術、芸能の資料蒐集」を目的とし、竹田は第一班に所属、京都の民俗芸能の資料収集を担当した。⁽²²⁾

竹田が祇園祭の民俗学的調査を行うのは、この第一研究班から研究を委嘱されたからである。

第二節 記録方法をめぐって―動画か静止画か―

第一研究班は、昭和三五年度は京都の夏祭りの代表である祇園祭の諸行事を、民俗学的視点から調査し、資料を収集することにした。その記録収集方法がカラーフィルムによる写真撮影である。

研究班は、同志社大学の三品彰英を代表とし、竹田が実働の責任者さらに、高取正男、写真家の清水実、当時、大学院生であった河原正彦ら諸氏から構成され、同年六月下旬から八月下旬にかけて調査を実施した。

六月二五日に研究の打ち合わせを行なった竹田は、同月二七日、三品・高取と調査方針を協議・確認し、昭和三三年度より同研究所の共同研究で実施した、京都の念仏系民俗芸能の映像記録撮影とは異なる方法で、今回の祇園祭調査は行うことを決定する。

一昨年来、念仏狂言等の調査に用いた録音・映画の方法による記録は経費・技術の両面で限界のあることが明かになったのと、将来の出版などを考慮して、カラースライド一式によることを決定。

本調査の趣旨と計画を確認したうえで、カラーフィルムによる写真撮影とそのカラスライド化を決したわけだが、先に行なった映像記録撮影による資料づくりには、経済面と技術面で大きな負担・限界があったことを吐露している。

その問題点とは、拙稿でも指摘したが、

①映像撮影機器とその現像などの経費

②映像撮影機器の技術を十分に消化していないこと

③撮影位置の確保

④映像と音源の同調、

といったもので、また、将来にカラー版の出版物を刊行する予定であることから、印刷に適する静止画による撮影としたのであった。

本調査の予算は同月二八日、三品彰英を介して、総額八万二七〇〇円を同研究所に提出したが、実質的予算ははつきりしない。

第二章 調査開始とフィルムをめぐる

第一節 ポジカラーフィルム使用の方針

七月一日、船鉾の吉符入り式より調査は始まり、そのまま、同町の御神面・腹帯改めの儀を調査、翌日は市議会堂でくじ取式を撮影、三日、同志社大学の小川光陽氏より広角レンズを借用し、五日より、各鉾町の二階囃子を撮り進めた。同日から河原正彦氏が調査に参加する。八日は朝方から豪雨で調査撮影が進まないなか、同日、竹田は高取とともに三品彰英宅を訪問し、現状報告と実行予算について協議した。そこで、

将来のデラックス出版を予想し、技術的見地からする清水氏の建策に基づき、使用フィルムはポジカラー一式に統一することを一同で確認しあう。

と、調査成果の出版のため、使用フィルムを、ポジカラーフィルムで統一することを確認、その後、清水氏と予算構想上、写真撮影は千枚前後にすることを話し合っている。

一般的に知られていることだが、ポジフィルムは印刷・出版に適したもので、今回の調査はその成果を、カラー図版によって出版することが前提となっていたことからの採用であった。

第二節 ポジ・ネガカラー併用方針

九日から雨もあがり、各鉾町での鉾建ても進みつつあるため、竹田は精力的にそれらの写真を撮影し廻る。

ところが一〇日、同月一日・二日撮影の吉符入り・くじ取式などのフィルム現像が清水氏宛に届いたが、「スポットライトを使用し、また助手のストロボ使用未熟のため、画像おしなべて清水氏にも意外に不出来」であった。

スポットライト使用・助手のストロボ使用未熟などから、露光などが十分ではないことが不出来の原因であろうと推察できるが、このことは、伝存する写真と左掲史料からも、

現装備下のポジカラーとしては避難い技術的限界によるものらしく、この欠点克服のためには、ネガカラーにするか（感度はポジの三倍、但し印刷には不向）、アメリカ製コダックの精品にするか（価格約三倍、また入手に若干の時日を要す）、光源を数倍にするか（機動力を著しく殺がれ、随時借用する一般家庭の電源を

破壊する恐れあり）など幾つかの方法が考えられるが、皆夫々に制約あり。

と述べられていることからうかがえる。現状では、露光とポジカラーの被写界深度の技術的問題は克服できないので、清水氏は

- ① ネガカラーへの転換
 - ② コダック社製のポジカラーにするか
 - ③ 光源を数倍にするか
- との案を提示した。

史料にあるように、それぞれにデメリットがあった。①は、感度はポジの三倍となるが印刷には不向きであり、出版計画上、適さない。②のコダック社のポジフィルムに変える案は予算超過となることは必定で、しかも、取り寄せに日にちがかかることを考えると、調査が進行しているなかでは現実的ではない、③の案は屋内・屋外の調査であり、諸行事の行為などを撮影することを考慮すると、移動などに支障をきたすとともに、電源を借用した家の電源を壊す危険性があった。

竹田は高取・清水両氏と相談のうえ、

ポジとネガとカメラ二台（清水のと竹田のと）を併用し、夜間・室内の撮影はネガカラーに統一する方針を立てる。使用のカメラは二台とも、当調査の満一カ月間余、殆ど他の用途を断念して専用化を余儀なくされるがこれもやむをえない。

と、清水氏のカメラと竹田のカメラをポジとネガに分けて併用して使用することとし、夜間・室内はネガカラーによる撮影に統一することにした。

竹田はこの方針転換の決断を「意外のところに意外の困難が横たわっているものだ^②」とのべる。この意外な困難が、この調査が進むにつれ、大きくのしかかってくるのである。

この日の夜、早くも竹田はその意外な困難に直面した。竹田は同夜、御迎提灯列の撮影に挑むが、

ここでもカラーフィルムのもつ可写深度の限界性に幾度か涙を吞みつつ、それでも鷺舞を中心に要所を数枚撮る。

と、この撮影においても、カラーフィルムの被写界深度の限界からか、納得できる撮影が実現できないなか、鷺舞を中心に写真を撮った。

同日夜は神輿洗いの撮影のため、竹田をはじめ、調査班は八坂神社界わいを奔走する。

七月一日、長刀鉾稚児の位貫いの社参を、稚児の昇殿から退出まで一部始終を詳しく撮影し、そのあと、調査班メンバーは昼食を兼ねた作戦会議を開く。竹田はその席上から、

この調査の頭初部分の現像成果から鑑み、ネガカラーを併用に決した昨日来の方針を席上三品教授に電話で報告。

とあるように、調査初期の撮影成果から、ポジ・ネガフィルム併用の方針転換を、本調査の長である三品彰英に電話で報告した。

その後、清水氏は昨夜撮影した神輿洗いの現像成果が気になることから、大阪の現像現場に赴き、高取は帰宅、竹田は河原とともに大学に戻り、庶務をこなしたあと、「今堀文書研究会」に参加、夕方から、三品と会談し、

ポジカラーのみ専用の最初の方針からネガ併用に切り換えること、是非とも成果刊行に漕ぎつきたい一同の熱意のこと、全員の士気もその点に大きくかかっていることなど三品教授と夕方まで懇談数刻。五日振りで丹波の留守宅に帰る。

と、ポジ・ネガカラー併用方針へ転換したこと、調査班の熱意は調査成果刊行にあること、そのことが全員のモチベーションを高めていること、を伝えた。方針転換による予算縮小や調査そのものが断念されることを懸念しての発言であったのであろうか。

さて翌朝、竹田は清水氏持参の超望遠レンズにて、各鉾の鉾頭・天王・赫熊を撮って廻るが、このことを「科学と瀆神の接点スレスレ」⁽²⁶⁾だと感じている。こういった発言は、竹田の研究者としての良心のあらわれともいえよう。

ついで、長刀鉾稚児の柴田家を訪問し、昨日の位貫いから始まった潔斎生活の実態を撮影しようとした。しかし、屋内ということもあって、

予想通りその実態をレンズに収めることは極めて難しい（カラーでは殊に可写深度が浅い）。別室・別火の男炊ぎといってもカメラに表現することアクセントがない、

というように、室内撮影における「可写深度」の浅さから、ピントがあっているようにみえる範囲が狭く、撮影するアクセントに欠けると吐露している。

撮影方針からすると、ネガカラーによる撮影であったと考えられるが、だとすれば、ネガカラーであっても、被写界深度が問題と感じていたことがわかる。

第三節 再度の方針転換

七月一三日、清水氏は体調不良もあるなか助手を帯同し、一里塚神饌を撮影するが、竹田は清水氏の容態が悪化しつつを認め、休養をとるよう進めて、同氏の助手に撮影を代行させることとし、保昌山・占出山の山立ての撮影を行う。そのようななか、

被写体の光線状況を即座に判断して、互いに所要ライトの条件を異にするホジカラーとネガカラーを群集の雑踏と連続作業の中で機敏に切換えることは、専門家にも不可能に近いとみえる。

とあるように、山立てという行事が進行していくなか、光線状況などをすぐさま判断しつつ、進行する「行為」「行動」をポジカラーの力

メラでの撮影とするか、あるいはネガカラーのカメラで行うかを瞬時に選り分け撮影することは、専門家でも困難であると判断した。そこで、

やはりポジカラー一式の頭初の方針に戻し、それで成功覚束ないシーンは断念の他あるまい。今となつては清水氏の容態の回復をひたすら祈念するのみ。

と、清水氏の容態回復を待ちつつ、当初方針のポジカラーでの撮影に戻すことを再度、決断する。

この調査では、当初より使用フィルムをポジとするかネガとするかで方針が二転三転するなか、昼夜、あるいは屋外・屋内の光線状況にどのように対応すればよいか、また、被写界深度への対応にどうすればよいかで困惑している。

これなどは、当時のカメラ技術から生じる写真撮影の限界であり、同時期の民俗芸能調査における技術的限界をしめしているといえよう。一五日早朝、竹田は高取正男の強い勧めで、四条烏丸の御手洗の井戸開きを採訪、朝食後、太子山町で奇応丸本舗の建物・神灯などを撮り直し、山伏山で聖護院修験の祈禱風景を見学、清水氏が鉾飾りの夜間俯瞰撮影を提案したことに対応すべく、連合保存会と大丸京都店と交渉、両者から快諾を得て撮影する予定であったが、降り出した雨により中止、撮影を翌日に延期した。

同日、雨の中、竹田は月鉾の鉾巡りをする長刀稚児の撮影にむかう

が、

脇侍の禿を従へた稚児が雨滴に色映ゆる鉾床に立った光景は、まさに一幅の錦絵というか、近世町衆文化の粋というか、その妖しいまでの美しさは到底筆舌に尽くし難い。かつては長刀鉾意外にも生稚児がいたと聞く。いわゆる男色の心理も何か判るような気がし、又前代の町衆の気宇に打たれる。それだけにカラーフィルムの技術的限界で、これが撮れない口惜しさ!!

と語るように、雨が煙るなか、「雨滴に色映える」長刀稚児の姿に、近世町衆文化の粋を感じるとともに、その妖しいまでの美しさを絶賛している。

それだけに、フィルムの技術的限界から、長刀稚児の色気と町衆文化の粋を表現しきれないことに隔靴搔痒の感をもった。

第三章 撮影の続行

第一節 山鉾巡行の撮影

翌一六日、菊水鉾の清祇式撮影などをメインにしながら、本日に延期した鉾の夜間俯瞰撮影を、午後六時より大丸屋上から行った。

快晴薄暮で絶好の光線状況もあり、清水氏は「思う存分腕を振」るい、その足で宵山最大目標の「本社遷霊」に立ち会って、その後、鉾町に転じ、屏風祭などの撮影にいそしんだ。

一七日、山鉾巡行当日、竹田はこの日を迎えた心境を、つぎのように言い表わしている。

いよいよ本番の鉾巡行当日！ 月初以来、朝に一城を抜き夕に一壘を降して漸く本丸に迫ったという感じ。

長刀鉾稚児の乗り込みや注連縄切りなどの瞬間を順次、撮影している、鉾廻しの始まった十一時ころに、高取は清水氏の弟とともに上久世に向かい、駒形稚児を撮影した。竹田らは清水氏と帰り山・帰り鉾を烏丸御池で撮るなどした。

前祭の山鉾巡行撮影はくじ改め場で「巡行する山鉾を遂って晴装を次々と撮って」²⁷ いき、御池通に先回りして巡行が来るのを待ったが、この時、調査班全員が逆光線になることを失念して、山鉾を撮影ができなかったのは、調査の高揚からくる判断ミスであろうか。

その後、竹田と清水氏は烏丸御池において帰り山・帰り鉾を選写するなどし、五時過ぎに八坂神社南大門に待機、ツルメソその他の神幸列撮影に備えたが、定刻より一時間半遅れで列は到着、所期の撮影をすませたあと、四条御旅所にカメラを移し、中御座の神輿着御まで待ち、九時頃、ようやく撮影は終了した、

翌日は全休とし、明けて一九日より後祭りの撮影を開始した。前祭り撮影で予算が超過していることから、竹田は三品と協議し、三品より約三万円で立案するように指示され、おおよそ二万円、フィルム十本ほどと見積もり、二一日より撮影を再開していくが、竹田は心身と

もに疲労が蓄積していることから「祇園祭調査も長期に亙り少しダレ気味」と告白している。

それが反映してか、後祭りの宵山である二三日、南観音山の神主祓いの撮影をうっかり失念してしまい「幾らも撮り得たものと地団駄踏んでも、そこそ「後の祭」と悔しがっている。

この日の夜、同町の暴れ観音の撮影を行い、「祇園祭の構造の複雑さに再び思を新に」し、その後、四条御旅所で日和神楽と芸妓の無言詣りを選写した。

二四日、後祭りの巡行を迎え、「月初以来の採訪もいよいよ大詰」めと、朝八時に調査団は集合、三条通の日本銀行前に脚立を立て、

長谷川松寿堂前のくじ改めを鯉山のケースで組写真を造ること、
前の祭の苦い経験に凝り、カメラを一個所に固定して巡行の山全景を確実に収録することなど手筈をきめる。

というような定点撮影の方針で、巡行の山を撮影した。この撮影方針は前祭りが山鉾の巡行を追いかけけるかたちをとった反省によるものであった。

四条御旅所に位置を移し、室町三条に帰り山の通過を待ちつつ昼食、鈴鹿山の解体を背に、調査班は記念撮影をして、一旦、宿に帰り、午後四時半、還幸祭の調査・撮影に挑むため、再び、街に繰り出した。

この日を境にして、本格的な調査は終息する。

三〇日、午前十時からの神事済奉告祭を清水氏に撮影してもらい、

竹田自身は午後より、連合保存会副会長の田中氏と八坂神社へ腕章の返却ともに、御礼に向いた。

これをもって、満一カ月に及ぶ、竹田の祇園祭の民俗学的調査・写真撮影は終わったのである。

第二節 成果の報告と未完の出版

撮影された写真は逐一カラー・スライド化されたが、一〇月二日、大学内外関係者に「公開試写」された⁽²⁸⁾。

また、一〇月八日・九日に日本大学で開催された第十二回日本民俗学会年会の一日目午後から行われた公開講演会で、竹田は「カラースライド「祇園祭」（解説）」を講演し、聴衆に撮影した祇園祭のカラー・スライドを公開・解説している⁽²⁹⁾。

このおりの反応のよさから、出版実現の手ごたえをうけた。加えて、十一月一〇日の同志社大学創立八五周年記念講演会では、竹田は「祇園祭の民俗学」と題する講演を行なっている⁽³⁰⁾。

このように、竹田は調査結果を公開し、成果の共有化を図っているが、いかなる理由かは判然しないが、この調査を支えた最大の理由であるカラーデラックス版の書籍は刊行されなかった。そのためか、その後、この成果が生かされていくことはなかった。

前述したように、同志社大学では全学体制で、調査成果を学術書として刊行することとし、その作業も相当進め、同時に、翌年、竹田はくじ取式や長刀鉾の稚児舞などを再調査、再撮影して刊行の準備を行なったが⁽³¹⁾、諸般の事情から出版は見送られたのである。竹田は終世、

このことを残念がっていた、という⁽³²⁾。

おわりに

本調査は現代祇園祭調査史上、人類学者米山俊直氏の調査⁽³³⁾に先立つ、ごく初期のものといえ、加えて、カラー写真八八八枚という、非文字資料である画像資料によって、当時の祇園祭の諸行事を、民俗学的角度から網羅的に撮影したことは大きな価値を有するもので、いわば、写真による祇園祭の民俗誌といった性格ももつ。

『日記抄』を一読しても、竹田ほか、調査班の苦労は並大抵のものではなかったことが十分にうかがえるが、変貌しつつあった祇園祭、あるいは京都の町々の景観を、写真で切り取りつつ、今日に伝えたことは、竹田の研究のうえから本流ではないとしても、特筆すべきものと評価できよう。

また、この調査のなかで、当時の写真技術から克服できなかった問題が露光や「可写深度」、つまり被写界深度であり、竹田は調査の中で、とりわけ、夜間・屋内撮影のなかでこの課題にぶつかる。目で見える被写体の姿を、どうしても表現できないくやしさを『日記抄』のなかで何度も繰り返しのべているが、この問題は当時の民俗芸能調査における技術的問題としても、今後、論議されるものではなからうか。

学術における野外調査などの技術論は、単に、調査方法論だけの問題ではなく、そこに投入されるテクノロジが学史的にどのような意味を持ち、その時代においてどういった効力があり、同時に限界があ

ったのか、を考察していくべきである。

今日、学術的にも一般的にも、個人が静止画像の写真を撮ることは相当に容易となった。いうまでもなく、デジタルカメラの発展と普及によるものであり、大容量の保存、かつ操作の平易さも格段に発達している。

この動向は動画像も同様で、現在、普及しているデジタルビデオカメラの場合、技術的に長けていなくても機器操作は容易く、また、コンパクトかつスリムであるため、持ち運びにも便利である。しかも、記録容量は大容量化しているため、民俗調査などのフィールドワーク系の調査では、ビデオ機器の携帯は常識のようになっていく。

さらに、録画像の編集などは、パソコンのハードディスクに撮影内容を移し専用ソフトなどを用いることによって、専門家でなくとも、個人編集が難しくなくなったため、安易な映像記録撮影などもなされるようになっており、映像技術環境の革新的進化の前に、学術はどのような対応が必要であるのか、近年、学会レベルで問題が討議されている。³⁵⁾

民俗芸能における技術論的課題は、いつ、どのようなテクノロジーが投入され、それがどういった成果を生み、如何なる影響を与え、同時に問題点は何であったのかを、技術史的論点を加味しつつ、学史として検討すべきであろう。

そうすることによって、俗に言われる調査地被害などを考えるうえでの要素ともなりうるのではないか。³⁶⁾

〔注〕

(1) 寿仙院編『葩と實と』(寿仙院、一九八八年)、佛教大学アジア宗教文化情報研究所編『ある民俗学者の軌跡―竹田聴洲とその学問』(佛教大学アジア宗教文化情報研究所、二〇〇八年)。

(2) 大野啓氏の一連の研究や岸田史生「竹田聴洲の民俗学とその思想的背景」(伊藤唯真編『宗教民俗論の展開と課題』法蔵館、二〇〇二年)、あるいは二〇一二年二月二日(日)、佛教大学二条キャンパスで開催された京都市民俗学会(兼第八六回日本民俗学会談話会)の、「いくつかの『先祖の話』―京都で読む柳田祖霊神学―」と題するシンポジウムなどが一例としてあげられよう。

それぞれの報告者の発表内容の要旨は、『日本民俗学』二七四号に掲載されている。

また、二〇一六年二月一日には、佛教大学宗教文化ミュージアムにおいて竹田聴洲生誕百年を記念するシンポジウム「生誕百年記念 竹田聴洲の人と学問」が開催された。

(3) 竹田聴洲著作集刊行会編『竹田聴洲著作集』全九巻(国書刊行会、一九九三―一九九六年)。

(4) 故竹田保子氏よりご教示いただいた。二〇〇七年七月三十一日、寿仙院及び佛教大学アジア宗教文化情報研究所において。

(5) 竹田聴洲「京都祇園祭調査探訪日記抄」(『同志社大学人文科学研究所紀要』第四号、一九六〇年)の冒頭に、

第一研究(「近代京都に於ける社会的発展の諸条件」)の意識思想部門は今年度は夏祭の代表たる祇園祭の諸行事を、民俗学的角度から調査して専ら資料を蒐集する方針に拠り、今年七月・八月にわたり計八八枚のカラー 슬라이ドを収録した。ここに抄出したのはその探訪日記の一部である。

とある。

現在、これらのカラー スライド原本とそれらをデジタル化したデジタルデータは佛教大学宗教文化ミュージアムが蔵している。

(6) 画像資料と民俗誌との関わりについては、倉石忠彦「画像資料と民俗

誌」（國學院大學學術フロンティア事業実行委員会編『國學院大學學術フロンティア事業 人文科学と画像資料研究』第1集、國學院大學日本文化研究所、二〇〇四年）参照。

(7) 前掲注(5)、竹田聴洲「京都祇園祭調査探訪日記抄」（『同志社大学人文科学研究所紀要』第四号、一九六〇年）。

(8) 『中外日報』昭和三十六年七月五日「祇園祭のすべてを収録 一千枚のカラースライド本を出版」。

(9) 前掲注(4)、故竹田保子氏よりご教示いただいた。

(10) たとえば、柳田國男、折口信夫が画像資料をどのように考えていたか、に関しては小川直之「画像資料と民俗学」（國學院大學學術フロンティア事業実行委員会編『國學院大學學術フロンティア事業 人文科学と画像資料研究』第1集、國學院大學 日本文化研究所、二〇〇四年）などを参照のこと。

(11) 拙稿「京都文化史学派と映像記録撮影の系譜」（『芸能史研究』二〇六号、二〇一四年）。

(12) 拙稿「竹田聴洲と京都の念仏系民俗芸能の映像記録撮影について」（『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』第一〇号、二〇一四年）。「なお前掲注(2)の生誕記念シンポジウムにて筆者は「竹田聴洲と京都の民俗芸能調査—映像記録撮影を中心に—」と題し、研究報告を行った」。

(13) 芸能史研究会第五三回大会「いま、祇園祭を見つめ考える」において「竹田聴洲と祇園祭」と題し口頭報告を行った。なお、報告の内容は後日、別稿を用意している。

本稿では以下、主に前掲注(5)の竹田聴洲「京都祇園祭調査探訪日記抄」（『同志社大学人文科学研究所紀要』第四号、一九六〇年）を用いて考察を進めるが、その際、本文史料引用のうち、とくに引用を断らない場合は、本書よりの引用である。

(14) 前掲注(1)論考参照。

(15) 右同「葩と實と」所収「悶々の本郷」及び「京洛に咲う」。横田健一「交遊四十有三年—文化史・民俗学・旅—」（『葩實』寿仙院、一九八

〇年）十頁。

(16) 右同、横田氏論考。

(17) 右同。

(18) 右同横田氏論考十一頁。蘇理剛志「京都帝国大学民俗学会について—関西民俗学の黎明—」（『京都民俗』第十九号、二〇〇一年）。

(19) 竹田聴洲「緒言」（『民俗佛教と祖先信仰』東京大学出版会、一九七一年）七頁。

(20) 同志社大学人文科学研究所編『人文科学研究所30年史』（同志社大学人文科学研究所、一九七五年）二六—二七頁。

(21) 右同。

(22) 右同。

(23) 前掲注(12)拙稿。

(24) 前掲注(5)に同じ。

(25) 右同。

(26) 右同。

(27) 右同。

(28) 前掲注(20)に同じ。

(29) 「彙報」（『日本民俗学報』第一四号、一九六六年）。

(30) 前掲(20)、三一頁。

(31) 前掲注(8)に同じ。

(32) 前掲注(1)、寿仙院編『葩と實と』（寿仙院、一九八八年）。

(33) 米山俊直氏は昭和四八年（一九七三）から同五〇年（一九七五）に祇園祭を都市人類学の手法で調査し、その後、同五八年（一九八三）より同六〇年（一九八五）に再調査を行った。

ここでは、同氏「祇園祭 都市人類学ことはじめ」（中公新書、一九七四年）、同『ドキュメント 祇園祭 都市と祭と民衆と』（NHK出版、一九八六年）をあげておく。

(34) 丹羽美之「交差する映像と学術—映画・テレビ・デジタルメディア—」（『日本都市社会学会年報』二九号、二〇一一年）参照。

(35) 多々、問題提議や言及などがなされているが、ここでは、つぎのよう

な論考や動向をあげておきたい。山路興造「京都・民俗芸能の今―デジタルアーカイブをめぐる―」（『アートリサーチ』創刊号、二〇〇一年）、植木行宣監修鹿谷勲・長谷川嘉和・樋口昭編『民俗文化財保護行政の現場から』（岩田書院、二〇〇七）、石田佐恵子・岩谷洋史「映像資料の収集と保存をめぐる―デジタル化時代の映像社会学に向けての試論」（『都市文化研究』一一号、二〇〇九年）、西郷由布子「民俗芸能の撮影―渋澤による16ミリフィルム「花祭」の位置付け―」（『神奈川大学国際常民文化研究機構年報』第一号、二〇一〇年）。

（36）静止画像などに対する民俗学史的検討や技術論に関しては、國學院大學学術フロンティア事業の「人文科学と画像資料研究」などが先駆的である。

（さいとう としひこ 歴史文化学科）

二〇一六年十一月十五日受理